

東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時): 薬学部薬科学科 細胞情報学教室 4年

留学先大学・参加コース: 北京大学 Population Aging and Health

コース期間: 2012年 7月 2日 ~ 2012年 7月 27日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 ⑤民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

北京大学は中国の高等教育機関において最高峰といわれている大学です。中国人が観光に来て校門の前に並んでいることもあるくらいメジャーな大学で、日本における東京大学と同じ位置づけだと思われます。北京大学は北京市の北西に位置していて、北京の中心からは少し離れています。キャンパスはとても大きく、本郷キャンパスの何倍もあります。



北京大学構内にある、未名湖の写真

2. 留学の動機

私にとってはこのIARUGSPが人生で初めての留学でした。3年の夏頃から自分の将来の進路を考えるようになり、大学にいるうちに自分の英語をある程度使えるレベルまで高めようという目標を立てました。また、個人的に海外の大学で勉強することに憧れもあり、大学生のうちになんらかの形で留学をしてみたいと思っていました。ただ私は薬学部の4年で研究室に所属していることもあり、中~長期の留学を計画することは厳しい状況でした。そんな中東京大学のホームページで見つけたこのIARUのプログラムは、研究室の院試休み中に行われるものが多く、しかも世界中の優秀な学生達と一緒に勉強し、生活するというプログラムで、自分にとって非常に魅力的なものでした。とくに北京大学では、薬学部にも所属している自分にとっては関心のあるPopulation Ageing and Healthという医療に関わるプログラムを行っていました。また同時に、薬学部大学院の試験日程との兼ね合いもよく、費用も比較的安価で、教養学部のときに中国語選択だったこともあって中国にいつか訪れてみたいという思いもあったので、IARUの北京大学のプログラムに応募することに決めました。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

まず、留学の下調べや申請書類作成はできるだけ早く行った方がいいです。実際にどの留学のプログラムに参加すべきかは、もちろん大学やプログラム内容も大事ですが、期間や費用もしっかり考慮に入れて決めなければなりません。大学の授業料や寮費は IARUGSP または各大学のホームページで調べられるので、候補となるプログラムについては全て調べておきましょう。航空費もネットを使えばだいたいの相場はわかります。各プログラムでどれくらいの奨学金がもらえるかは、実際には参加が決まったあとでないと分かりませんが、去年の参加者の体験談を読んで参考にすることはできます。

また、各所属学部で申請書類提出期間が異なることがあるので、所属学部の教務に事前に確認をとっておいた方がいいです。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

少なくとも中国のビザ作成にはほとんど手間はかかりませんでした。中国大使館のホームページからビザの申請書類(中華人民共和国査証申請書 1,2)をダウンロード、印刷し、ネットに上がっている記入例を参照して必要事項を記入し、中国大使館(六本木にあります)にパスポート、北京大学から送られてきた Admission letter とともに持っていくだけです。私が申請したビザの種類は、訪問ビザ F です。ただ、大使館は午前中しか空いていないので、どこかしらで時間を作っていかなければならず、書類を提出して 4 日後にビザをまた取りに行かなければならないので、この事を頭に入れて出国前までに確実にビザをとれるようにしましょう。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

三井住友海上の「特定手続海外旅行保険」に加入しました。金額は 5450 円でした。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

IARUGSP に申し込む前に、私の所属する研究室の教授に 7 月はじめ～終わりにかけて留学のプログラムに参加したいということを報告し、許可を頂きました。授業や試験がプログラムとかぶることはありませんでした。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

基本的に研究室で忙しかったので、しっかりとした英語の勉強はできませんでした。ただ、IARUGSP に申請する前は TOEFL を受けたことがなかったので、その TOEFL の勉強を通して英語を勉強しました。当時は TOEFL の点数は高くなく、90 弱でした。中国語の勉強もほとんどできませんでした。

ただ帰国子女でない人は、やはり時間があるなら英語の勉強(とくにリスニング、スピーキング)はしっかりやっておいた方がいいと思います。また中国にくるなら、中国語の勉強(とくに会話の勉強)をしておいた方が現地で何かと役に立ちますし、北京大学での中国語のクラスも上のクラスに入れるので有意義だと思います。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

私は国際学生証の割引を使って、海外で使える携帯電話を空港から借りてきました。ただ、北京大学でも携帯電話を借りることができて、実質そちらの方がかなり割安なので、日本でわざわざ借りる必要はなかったと思っています。ただ、北京で学生どうして連絡をとるのに携帯電話は不可欠なので、何らかの形で準備する必要があります。

また、ノートパソコン、カメラ、ガイドブック(「地球の歩き方」はおすすめです)、常備薬は絶対に必要です。電子辞書(中国語辞典も入っているもの)もあると良いと思います。日本円をある程度持ってきた方がよいと思います。北京大学の近くの銀行で円を元に変えられます。こちらの銀行に円のストックはないので、5千円単位で持ってくることをおすすめします。ただし、少しでも破れてると受け取ってもらえないので、きれいなお札を持ってきました。

基本的に生活道具はこちらのスーパーでほとんど安く手に入るので、あまり心配する必要はないかと思います。

服装に関しては、7月の北京は常に30度近くで非常に暑いので、半袖Tシャツ、半ズボンを中心に持ってきた方がいいでしょう。あとサンダルを持ってくると何かと重宝します。

4. 留學生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

北京大学の留学生用の寮で生活していました。寮の部屋にはベッド、机、椅子、タンス、エアコン、電気ケトル、ネットの有線があります。また2人共用でシャワーとトイレがあります。宿舎内にはコインランドリーも設置されていますが、冷蔵庫はありません。学校から非常に近いところにありとても便利です。個人的にはとても快適でした。



私達が滞在した寮、Global Village PKU の写真

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

基本的に北京市内では英語は通じません。最低限の中国語は使える必要があります。

7月の北京は非常に暑く、平均30度くらいありますが、湿度は高くありません。ときおり急に雨が降ってくるがあるので、折りたたみ傘は必要かと思います。

大学周辺にはスーパーマーケットやレストランもあり、とくに不自由はありません。ただし、基本的に学校内も外も食事は全て中華料理で濃い味付け&油っぼいです。ただ値段は日本と比べて非常に安く、味も美味しいです。

基本的に移動は地下鉄を使いますが、どこまで乗っても一回2元しかかかりません。私はガイドブックで美味しい店を調べて、夕飯はできるだけ外でいろいろな種類の中華料理を食べるようにしていました。豪華な食事をしてもせいぜい100元程度しかかからないので、大変助かりました。

日本円の現金(きれいなもの)を持ってくることをおすすめします。クレジットカードが必ずしも北京で使えるとは限らないので。ちなみに私は三井住友銀行の口座のVISAカード持っていました。北京では使えませんでした。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安の悪さはそこまで感じませんでした。ただ、北京の交通ルールは非常に乱れているので、しっかり周りを見て歩かなければ危険です。また北京の水道水は飲めないなので、一度湧かすか飲料水を購入する必要があります。

私は留学中に病院に行ったことはありませんが、北京大学の病院は近くにあるようです。

食事の前には手洗い、うがいを極力して、見るからに不衛生な環境で売られている食べ物には手を出さないようにしていました。しかし、何度か腹痛と下痢にかかったことはあったので、食あたりの薬は持ってきておいた方が賢明かと思われまます。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃:往復約5万円 授業料:10000RMB(約13万円) 寮費:1ヶ月で、2660RMB(約3万5千円) 携帯代:約1万円 食費+娯楽費:約7万円

計 約30万円

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

① Scholarship For Short-Term Visit / Short-Term Stay Program by JASSO

より8万円

② スペインの銀行グループ、Banco Santander

より1700ドル、約13万円

計 約21万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

毎週土曜日には北京大学が市内の観光名所につれていってくれます。(世界遺産や劇など) 日曜日や平日の授業後には IARU のメンバーみんなで、市内の観光や夕食にでかけました。1ヶ月も滞在していたので、めぼしい北京市内の観光地はほとんど回ることができました。大学構内にジムスポーツ施設、カラオケがあるので、そこでみんなで遊ぶこともありました。

留学期間中は、希望すれば、北京大学の学生の国際交流、カンフーや民族衣装のクラブ活動に参加することもできます。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

Population Aging and Health

Local Traditions and Chinese Society

Basic Chinese

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

全ての授業が英語で行われます。Population Aging and Health では課外活動として老人ホームに訪問することもし

ました。 Local Traditions and Chinese Society では授業毎に課題文献、ビデオが与えられましたが、非常に量が多く全てをこなすことはできませんでした。どちらも最後に paper の提出が求められます。

中国語の授業では、レベルにもよりますが、基本的に会話で使える中国語を学びます。

③学習・研究面でのアドバイス

とくに気をつけることは何もありません。ちなみに Discussion はそれほど行いませんが、授業中に意見を求められることはあるので、最低限自分の意見を英語で伝えることができる必要があります。

④語学面での苦労・アドバイス等

私にとって海外で英語を使って生活するのはこれが初めてだったので、最初はそれなりに苦労しました。とくに speaking よりも listening の方が問題でした。英語を生活の一部としている他の学生どうしが、流暢に早いペースで会話しているのを理解することは大変難しかったです。1ヶ月経っても完璧に聞き取ることはできませんでした。とくに北京大学にはアジア圏から来ている学生が多く、そのほとんどが訛った英語を話すので、きれいな英語を聞くことに慣れた日本人にはかなり聞き取りづらいとは思いますが。ただ、1対1で話しているときは相手も少しペースを落としてくれたり、繰り返してくれたりするので、コミュニケーションに困って問題がおこることはありませんでした。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

IARU には、英語が堪能な北京大学の学生が1人アシスタントとしてつきました。基本的にはその人に相談すれば、北京での生活におけるアドバイスやサポートをしてもらえます。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館には入れますが、海外の学生が本を借りるためにはお金が必要になります。

スポーツ施設には、ジム、プール、バドミントン、スカッシュ、卓球、ボーリングなどがありました。(全て有料)

食堂は大学構内に複数あって、どこも非常に安くボリュームがあります。食堂では1食 10 元ほどで食べられます。

PC は持参する必要があります。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

「地球の歩き方～北京～」ダイヤモンド社／ダイヤモンドビッグ社

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

もし今回の私のように、まったく海外経験がない人が IARUGSP への参加を考えているとしたら、とりあえず申し込んでみることをおすすめします。1ヶ月の留学では何も得られないという人もいますが、今まで海外経験のなかった私はとても密な時間を過ごすことができ、刺激を受けることができました。まず毎日英語を使うので、英語に対する抵抗がなくなりますし、どういう力が自分に足りないか身をもって知ることができます。1ヶ月の間では十分にその力を伸ばせなくても、日本に帰ってから集中的に鍛えればいいのです。また海外の学生と交流することで、固定観念を取り払って、自分の視野を外に広げることができます。私は今回このプログラムに参加できて本当に良かったと思っています。

③ その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。



IARU のメンバーと

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

This was my first time to study abroad and visit China; so all the things were new and unforgettable to me.

I decided to apply to this course for mainly three reasons. First, I really wanted to have an experience of communicating with foreign students “in English”. Since a few years ago I’ve noticed the necessity to be able to handle English, especially in speaking and listening. So I made up my mind to enhance my English skill to some extent during my campus life; however I had few good opportunities to use English in Japan. Therefore, I planned to study abroad then found IARU GSP in the site of my university. I really wanted to know to what extent I could do among the foreign students with my current English skill; therefore I resolved to apply to IARU. The second reason is that I just wanted to know what is China. I think China is most energetic country in the world because it has the largest population and is economically developing so fast. In addition, China and Japan are tightly connected in many aspects, positively or negatively. I just wanted to

see how students of the top university of such a country are like. And I wished to know about China deeply by living there and communicating with local people. Third, I cordially wanted to widen my perspective toward the world. Because I had no experience of living and studying abroad, I suspected that my view had been limited and domestic one. Therefore, I planned to know the ways of thinking of foreign students.

During this one-month stay in Beijing, I could attain all these goals. First, I could not help noticing that my English skill was in the lowest level among the students in GSP. Most students participating in the summer program learned English as a second language, but they could use English with no difficulty. Of course it was difficult for me to tell what I thought in correct and fluent English; however, what particularly embarrassed me was “listening to English”. I’ve listened to English to some extent in Japan, but here, the English was totally different from it. The speed was much faster and the pronunciations were not always clear (because their mother tongues were not English), so I often could not join the conversation and felt vexing. I’ve learned that the biggest difference between them and me is the frequency in English use. For example, people in Europe and Singapore are using English in daily lives in their countries; on the other hand we Japanese never use English in daily lives. I’ve never taken a class in English in my university. So now I realize that I have to listen and speak more frequently in much higher level to catch up with students in the world. I am going to continue training my English skill after this program.

Second, I could know about China deeply and come to like China during the program. We were able to visit a lot of historical places and learn the Chinese tradition, culture and history in this program. It really helped me to deepen my knowledge of China. In addition, I ate a variety kind of food here and sometimes I could communicate with local Chinese people. Now, I feel familiar with Beijing. I noticed it really interesting to learn about other country’s culture, tradition and history because these factors mark the characters of people who live there.

In addition, this participation in IARUGSP strongly affected my ways of thinking. What I had thought to be ordinal was not common at all in the world. For example, we Japanese people use only one language in our country but such a thing is rare in the world. Opposite to Japan, European people use both their own mother tongues and English, Singapore people use English and Chinese, Malaysian people use Malay and English, and etc. They learn and come to be able to use English naturally; therefore, they do not think studying abroad as such a difficult thing because they can easily overcome the language barriers. This means that it takes much more efforts for Japanese to come to do very remarkable work in the world with a good command of English. On the other hand, I could know that Japanese cultures were broadly appreciated among the international students. So many students knew Japanese cultures such as Japanese animation, comics, food, athletes and songs. In addition to this, they saw Japan as a well-organized and sophisticated country. This let me boast myself of being Japanese.

By the way, the best things I was able to get in this one month are friends. This is my first experience to make friends with foreign people; therefore talking and acting with them were really exciting for me. All of the foreign students in this program were really kind to me though I could not use English very well. I will never forget the days in Beijing spent with the supreme friends.

Now, this experience makes me want to study overseas again. I gained confidence in myself in this course and knew that I could manage in the international situation. Though it was short time, this study abroad gave me plenty of experiences and insights; therefore, if possible, I would like to study abroad for more than one year and acquire lots of things. Although it is not easy to find opportunity to do this because I belong to the laboratory now, I strongly wish I could manage some day.

Finally I would like to say thank you to all the people involved in this IARU GSP in the Peking University. This precious experience is my treasure forever.

東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時):法学部第二類(公法コース)3年

留学先大学・参加コース:北京大学 Population Aging and Health/ Local Traditions and Chinese Society/Chinese

コース期間:2012年7月1日～2012年7月28日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) ③.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

北京大学で7月2日から7月27日までの期間講義を受けました。IARUという東大、北京大学、Oxford University、Yale University、Australia National University、National University of Singapore、University of Copenhagen、などから構成される機構が開催する1ヶ月~1ヶ月半のサマープログラムに各大学から2~3人派遣して20人弱の生徒たちで一つのプログラムに参加するといった形態でした。ほぼ全員が選択した講義は「Population Aging and Health」と「Local Traditions and Chinese Culture」及び「Chinese」です。平日は毎日平均して5時間ほど講義があり結構密なプログラムですが週末はIARU参加学生全体での小旅行や外食などの娯楽も充実していました。講義形態としては東大の講義形態に似ておりあまり生徒からの発言や授業内議論といったものは活発ではありませんでした。課題も最後にterm paperを提出するといった形態で個人学習がメインでした。同じくIARUのプログラムで他の大学に派遣された友人の話や聞き取りグループで一つのものを完成させるものもあるらしいので各大学により異なるようです。事前に可能な限り情報収集して自己に適した講義形態や評価形態を選択することを強く薦めます。

2. 留学の動機

大学入学前から留学したいという願望が強く1,2年の間に交換留学に行こうと思っていたものの進学振り分けや海外大学と東大との学期・期末試験の開始時期の違いが足かせになって行くのを憚っていました。しかし4学期の年明けになり本プログラムの存在を知り、また法学部の試験が9月頭であることもあって7月丸々を本プログラムに費やそうと決意しました。IARUに参加する大学はどれも名門でそれらの学生らと意見を交換しあえる貴重な機会は滅多にないからこれを逃すまいという思いが直接の動機にも繋がりました。さらには、ここ10年間の日本の世界における停滞ぶりを見ていると果たして日本という国が世界の人からどのように捉えられているのか自分の目で確かめ、帰国後日本のために生かしたいと願っていたことも動機の一つです。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

手続きや準備は何かと時間がかかるので早めの準備が肝要です。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

一ヶ月前に中国ビザセンターに行き準備をしました。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

AIUの一ヶ月留学保険14000円ほど。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

法学部の期末試験は9月なので出欠を取る授業だけ事前に7月上旬の講義全欠席の旨を教授に連絡しました。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

帰国子女なので英語に関しては全く準備をしなかったものの申請にあたりTOEFLが必要だったので一回受けました。英語が苦手な人は準備をするとよいと思います。中国語の学習は出発前から集中的に取り組んでおいて良かったと思います。現地の方は北京大学の学生であっても英語が通じない、まして街中の方は全くなので最低限の中国

語は学習しておくべきだと思います。

⑥日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど
蚊取り線香、ムヒ、地球の歩き方。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舍の様子、見つけた方法など)

北京大学の正面にある海外留学生及び外国人観光客向けの宿舍に滞在しました。デポジット 500 人民元で一日 100 人民元でした。エアコン完備で共用リビング寝室個室という設備で申し分無い環境でしたが冷蔵庫があればなおよいといった印象です。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

北京の 7 月は東京の 8 月に匹敵する、もしくはそれ以上の暑さが毎日続く感じです。毎日 36 度くらいですが東京より乾燥しています。大学周辺は北京大学の他清華大学がある大学街ですが、食事するところは大学周辺あちこちにあり特に困ることはなく、地下鉄に乗れば 1 時間圏内で天安門など北京の主要観光場所にアクセスできます。食事自体は油っぽいですが日本人の舌に合うものが多く毎日楽しめました。金銭面に関しては中国だからといって安く済ませると思うと意外とお金が尽きるので余分に持ってくる、クレジットカードも持ってくるのが賢明です。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

どこにいても言えることですが真夜中に歩きまわるのは危険だと思いました。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

教科書代 0、寮費+食費+交通費+娯楽費=10 万円、航空賃 52500 円、授業料 130000 円。毎晩しっかりとした食事をし週末の小旅行やお土産や時折無駄遣いも含めて 10 万円で収まりました。最後の方は結構追い詰められたのでもう少し余裕があるとよいと思います。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

24 万円弱。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

週末の小旅行や文化行事。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

●「Population Aging and Health」

●「Chinese」

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

東大の授業と同じような一方通行型の講義形式。質問時間や意見交換時間が設けられていたものの特に活発といった印象は毛頭も受けなかったです。「Population Aging and Health」は予復習なし最終レポート 6 ページ、「Local Traditions and Chinese Culture」は予習で毎回 100 ページ程度の読書と最終レポート 10 ページ、「Chinese」は予復習宿題あり、最終テストあり、講義は全て中国語で行うといった形式でした。文学部で中国人教授の講義を取っていたこともありなんとか死に物狂いで付いていけた感じです。「Local Traditions and Chinese Culture」は完全に消化不良に陥りましたが英語を母語としている学生ですらとても手に負えない量なのでできなかったことを悲観する必要はないと思います。

③学習・研究面でのアドバイス

英語の要求水準がとにかく高いので本当にやりきれない自信がない限りあまりおすすめはできないと感じました。言葉の壁は強い意志と努力で克服するしかないと思います。

④語学面での苦労・アドバイス等

中国語でひたすら苦勞しました。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

語学面・学習面は別段サポートはありませんでしたがその他生活面などで分からないことでは IARU のプログラムの北京大のアシスタントの方から多々アドバイスをいただきました。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館、ジム、プール、カラオケ、ボーリングなど施設は充実していました。無線 LAN が各部屋・宿舎で利用可能でしたが中国の規制のため facebook や twitter は利用できないので VPN などの接続方法を準備しておくことをお勧めします。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

地球の歩き方。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

早めの準備が何よりも大事です。そして語学に関しては、国内でできる手段は最大限利用し尽くしてから海外に出るという姿勢も重要だと考えます。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

Even before I took part in this IARU program I was interested in studying abroad since I had entered the University of Tokyo. However, one of the biggest hindrances that had prevented me from studying abroad until this program are the exams of each semester until the sophomore's first semester, which determines the faculty you will belong to from junior. Because of this I was always discouraged to study abroad for a long period, since I was afraid of dropping out or having to study an extra year. Also the difference of the time when a new semester starts between the other universities outside Japan and the University of Tokyo made it even more difficult. For example if you want to study abroad during the summer holidays, since the exams are in July and usually the summer vacation in universities abroad starts in June, you have to skip them in order to study abroad. Fortunately my exam for this semester is in the beginning of September I was finally able to study abroad. Since this was my biggest desire since I entered university I was very excited and also

determined to make the most of it. The lectures at Peking University were all conducted in English so sometimes they were difficult for me to catch up with almost all the native English speaking students, though they were worth challenging and after I completed the program I feel more confident in myself than before. Besides the lectures I also had so many opportunities to speak with a lot of students from the universities of IARU all over the world, which was the most precious and valuable experiences among all. Sharing stories about the current political economic, cultural, and religious situations of one's own country enabled me to view Japan from an objective and worldwide viewpoint. Through this I noticed so many notable characteristics and virtues that the Japanese people do not recognize in their daily lives but are highly regarded among the people all over the world and big problems as well. For example, in Japan, people and the media tend to look only the negative side of things and lose hope for the future, or take things too seriously. From a worldwide standpoint, however not everything is bad as we the Japanese think. There are many aspects such as manners, virtues, values and rules that other countries could not manage possess at any cost. Noticing this difference in the way of thinking among the world, I have come to rethink the current situations of Japan and also change my way of thinking. Finally all the experiences during this IARU GSP program have led me to further understandings of other cultures among the world and further desires to study abroad again in the future. I will certainly seek for another opportunity during the rest of my bachelor years to study politics, economics, or arts abroad. Even if I don't have enough time to study abroad during my bachelor degrees, I am planning to go to a graduate school outside Japan or to an exchange program at Todai's graduate school.

東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時):教養学部 4年

留学先大学・参加コース: 北京大学 Regional Traditions and the Chinese Society, Population Ageing and Health

コース期間: 2012年7月2日～ 2012年7月27日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

北京に拠点を持つ中国で1,2位を争うトップレベルの大学。

2. 留学の動機

研究職を目指しているため、以前より英語を用いて海外の大学で学ぶ経験をしたかったこと、北京大学で行われる"Regional Traditions and the Chinese Society"は私の興味のある文化論に関する講義が行われていることが主な動機です。また、短期で開催されていることや学校主催のプログラムであることによって、逼迫した家計状況において比較的金融負担が少なく参加できることも魅力でした。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

やはりというべきか日本に比べて担当の職員が適当で苦労しました。日本の銀行からの送金が日本円か米ドルしかできないにも関わらず、中国元でのみ金額指定がなされていたため、送金金額について尋ねたところ「大体の金額を米ドルで振り込んでくれればいいよ、現地で差額を払ってもらうから、あるいは返金するから」という旨のいただいたのですが、結局現地で差額に関する手続きが行われることはありませんでした。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

旅行会社の言われるがままにビザ申請を行いました。短期であったため留学ビザなどではなく旅行ビザの適用となりました。2週間はかかったと思います。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

クレジットカード付帯の保険(携行品保証を含む)を利用しました。飛行機が遅延・キャンセルした際の保険は高額ですが、もしかしたら必要かもしれません。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

学部事務、担当教授に留学することを伝えるのみでした。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

英語に関しては授業以外特別なことをしていなかったため、TOEIC860程度の実力しか持っておりませんでした。中国語に関しても前期教養の授業で学んだ以上のことはほぼしていませんでした。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

延長コードがあると便利です。また、しばらく薄味の食べ物は口にできなくなるので日本食を精いっぱい堪能しておきましょう。

4. 留學生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

学校の留學生用のドミトリーが提供された。二人一部屋で、それがさらに共通部分のバスルームとベッドや机が備え付けられたそれぞれの個室に分かれていた。部屋が暗いため勉強には適さず、ベッドは非常に硬い。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

東京より北に位置する北京ですが、東京よりも遥かに暑い場所だった。また、ゲリラ豪雨のような短時間の豪雨が多発する。交通機関は地下鉄が主であり、路線も十分に発達していたためこれで殆どの移動が可能だった。バスも使用可能ですが、路線がやや複雑で地下鉄に比べれば使いにくくなっている。食事はキャンパス内に数多く存在する学生食堂か、付近にもある程度の飲食店がありそこで食べる。これは北京での食事一般で言えることですが、決して不味くはないものの非常に油っこいものばかりで、おいしいと言えるものは数が限られていた。お金は現金で持ってきた他、クレジットカードを所持していた。

③危機管理関係(留學先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

キャンパス付近や一般的な観光地ならば治安は良かった。大学も学生用の病院を持っており、旅行保険があればそこで対応できるようだった。また市販の薬は非常に安く、強力だった。ただし漢方薬ではなく西洋薬を買うことをお勧めする。ベッドがあまりにも硬かったので別に布団を買って敷布団にしていた。

④留學に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

授業料が13万円、渡航費ビザ含めて5万円、家賃4万円。その他の食費、交通費、娯楽費、おみやげなどを含めて5万円であり、週に1万円程度。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

IARU-Santander GSP Scholarships: USD1,700

Scholarship For Short-Term Visit / Short-Term Stay Program by JASSO.(Japan Student Services Organization): JPY 80,000

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

高齢化問題を扱う授業"Population Ageing and Health"において太極拳、カンフーのレッスンの機会が与えられ、参加してきた。授業後にキャンパス内のグラウンドや空き地に集まって1,2時間の練習を行った。週末には北京大学主催のツアーが組まれていた他、授業の空き時間を利用して他のサマースクールの学生と市内観光を行った。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

Population Ageing and Health

Regional Traditions and the Chinese Society

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

前者においては高齢化社会と言う問題に関してオムニバス形式の講義が行われた。課題が課されることやディスカッションを求められることはなく、ただ講義を聞くという形式だった。面白さは担当教師によりけりだった。また、老人ホームを見学に出掛けることもあった。上述の太極拳やカンフーもこの授業の一環として実施されたものだった。

後者は一人の教師による連続講義だった。初回授業において課題文献や課題映像の一覧が提示され、毎回そのうちの一部を予習されるように求められたのだが、他の学生の様子を見ても週に3回の授業に間に合うようにこなすにはやや過大な量だった。予習をしていた学生は最後にはほとんどいなくなったようだ。「中国の地域文化を学ぶ」との名目で先生お勧めのレストランに連れて行ったもらったこともあった。

③学習・研究面でのアドバイス

レポートのテーマが両授業ともにほぼ自由であったため、早い段階からどの授業についてレポートを書くかについて構想しておくことをお勧めする。

④語学面での苦労・アドバイス等

教師の話す英語はともかく、最初は友人の話す英語がほとんど聞き取れなかった。シンガポール人が多かったこともその一因にはあると思う。会話においてはひたすらにこにこして、分かるところではちゃんと返事を返して、寮に帰ったら英語を聞きまくるという生活をしていた。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

学生アシスタントがおり、彼女に気軽にメールで質問をすることができた。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

図書館はエアコンが動いていない部屋が多く、椅子が固く、全体的に薄暗いため勉強には不向き。また、貸し出しが実質不可能である上、そもそも日本語・英語文献が非常に少ないため基本的に役に立たない。ジムやバスケットコート、テニスコートがキャンパス内にあるほか、バドミントンのコートやボーリング場、カラオケなどが寮内にある。キャンパス内の食堂は一食200円以内で十分食えることができ、キャンパス外の比べても一般的に安い。味は決して良くない。PC環境としては、回線がやや遅く、中国であるため Facebook や Twitter などのアクセスができない他は問題がなかった。上記サイトに関して、極めて表示速度が遅いながら ECCS の外部アクセスを利用することで閲覧することができる。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

『地球の歩き方』が全般的な情報として役に立った。ここに載せられたレストランは外れたことがない。中国ではアクセスが禁止されているサイトにアクセスするための ECCS の外部アクセスも良く使った。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

日本の常識から考えれば、中国の人々(少なくとも北京の、インテリではない人々)は信じられないくらい無作法で身勝手な振る舞いをするので、覚悟しておくことをお勧めする。また、どの食事もおっく身体が食べ物を受け付けなくなる可能性があるので注意。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

私は当初留学というものを見くびっていたのではないかと思います。もちろん従来から英語の文献を読む必要性を感じていた以上、英語を学びたい、英語を学ばなければならないという思いはありました。しかしそれ以上に、「そこで開催される授業が自分の興味分野 (=地域間の文化の競合や融和に関する授業)に合致しているから参加する」といった、普通の授業を選択するとき同じような動機を以って留学を捉えていたのだと思います。つまり、普段自分が本籍の大学で続けている学習の単なる延長としてこの留学を捉えていたのです。

しかし、実際に留学が始まり、この認識は大きく変わることとなりました。何よりコミュニケーションの基礎である言葉が通じないのです。もちろん大学の英語の授業を受けたり、自主的に勉強を積み重ねたりして、自分でもある程度の英語力は付けてきたつもりでした。その結果、確かに授業で教授が述べることは「ある程度」理解することはできていました。しかし、それもあくまで「ある程度」だったのです。話が少し込み入った話題になったり、ふと早口になったり、私の知らない専門用語が多くなったりすると付いていけなくなるが多々ありました。このような形で教師が言っていることがわからないというのは私にとって初めての経験でした。

だが、それ以上に深刻だったのは友人の会話が聞き取れないことでした。実質的に、自分が話すことに関しては大きな問題はありませんでした。流暢ではないとはいえ、最低限必要なだけの語彙と基本的な文法構造は身につけている以上、自分の言いたいことは大方伝えることはできるのです。しかしそれに対する相手の返答を聞くとなるとからきし会話が成立しなくなってしまいます。それは相手の話す言葉に耳が追いついてくれないからです。それでも自分と相手との会話のキャッチボールになっているときは相手の返答がある程度予想できる以上まだましな方で、本当にディスコミュニケーションが発生するのは友人同士の会話に加わる時でした。英語ネイティブ、あるいはそれに準ずる話者が二人以上集まると、その人達の間だけでも順調に話が流れるようになります。そのような状況で一度会話の流れを逃してしまうと、文脈による補正効果も失います言葉が聞き取れなくなっていくのでした。

その時に、私は「これは留学なのだ」と実感しました。単なる学習ではなく、そこに「第一言語ではない言語でコミュニケーションをとる」という制約が課されるのが留学なのです。それに気付いた時から、私はまずその「コミュニケーションの成立」を達成するために努力を始めることとなりました。授業では

一言一句教師の言葉を聞き取る様に全神経を集中させました。友人との会話の中では状況を踏まえ、口元を見、会話の流れを読み、ありとあらゆる手を尽くしてコミュニケーション成立のために努力をしました。寮に戻れば英語のリスニング教材を聞き続けました。留学というものの第一制約にさえ気付いていなかった僕は、このとき初めて「留学」というものにちゃんと向き合うことができたのだと思います。

そして、そのコミュニケーションの基礎としての「国際理解」というものの重要性に対しても眼を開かされました。例えば、一番大きなカルチャーショックだったのは本当のクリスチャンと会ったことでした。もちろんそういうものだという認識自体はあったのですが、実際に言葉を交わしてみると、私がいくら日本の宗教観について説明してもわかってもらえず、逆に彼女がいくらキリスト教について説明してもわかることができない、という状況は非常に衝撃的なものでした。この例のような根本的なところから大学の習慣に至るまで様々な深度において、日本人とそれ以外の人達の間には大きな認識の差があることに気付かされ、本当にコミュニケーションを成立させるためにはその理解を深めることが大事だと改めて実感したのでした。

学習に関しても私の見方は大きく変わったと言っていると思います。サマースクール開始以前においても、前述のように私は学習と言うものに対して比較的高い意識を持ち、そこでの授業から可能な限りの知見を引き出そうと考えていました。しかし——もちろん最初は教師の会話自体を聞き取れないことも多かったため、それに耳が慣れ始めた留学期間の中盤を過ぎてからのことですが——、その意識もより高く、より広い視野を持ったものに徐々に置き換えられていくことを感じました。まずは、先生が引用や言及をしたり、予習として指定したりするさまざまなテキストに触れたためです。学問には国境は存在しない以上、留学前においても外国語文献にあたることも多かったのですが、先生が提示するありとあらゆる種類のテキストに触れ、日本語の外に広がる広大な知識の海の広さにあらためて気付かされることになったのです。いつもの図書館で満足することなく、現在非常に便利となっているウェブ検索やネット書店を通じて世界中の情報を仕入れなければならないと感じました。また、全ての領域においてというわけではありませんが、同じサマースクールに参加する学生の知識量や頭の回転の速さに触れ、優秀な同年代のライバルも視野に入れて頑張らねばならないと意識を新たにすることができたためです。そしてこのサマースクールを通して、彼らとはこれからも定期的に連絡を取り合い、互いを切磋琢磨していける仲になったと考えています。

つまりこの留学における数多くの挫折や驚きによって、以前の私の不完全で間違いだらけであった留学や学習に対する認識はより他の人の意見に開かれ、実りのあるものに変化したと振り返った今思います。

このような経験を経て、私はもう一度、今度はもっと長期間の留学に参加したいと考えるようになりました。具体的には、修士課程での留学か博士過程での留学を想定しています。それは、留学に参加して身につけられる能力がこれからの研究者に必要なものだと考えるようになったためです。

その前提には、これからさらにありとあらゆる領域においてグローバル化が進んでいくと考えられるこの現在の世界状況があります。研究者も他の領域と同じように、否応なくそこに対応していかなければならないはずで、つまりグローバルに活躍できる研究者がますます求められるようになっていくのではないかと予想されます。まずは、そのような状況で基本となる「コミュニケーション能力」、それを最も的確に身につけることができるのはやはり留学、それもある程度長期にわたるものによってであると思ったのです。更に先程の学習に関する意識の変化についての部分でも触れたように、世界中の研究を見渡して研究を進めることの有益さも踏まえれば、そのような視点が留学によって確実に開かれるものである以上、留学することは最早研究者にとって必須なのではないかと思うようになりました。

そのような長期の留学の資格を得るためには、これから更に英語、自分の専門領域において学習を深めていかなければなりません。専門領域において見識を深めて行くことは当然必要なことですが、以前はおろそかになりがちであった英語に関しても、例えば留学期間中に続けていたように毎朝英語のニュース番組を聞いてみることだったり、空き時間に読む小説を英語のものにしてみたり、日記を英語で書いてみたり、絶え間ない努力を積み重ねていくべきだと思ようになりました。

ある点では非常に苦しく、そうであると同時に非常に楽しく実り多いものであったこの留学を常に胸に留め、この目標の実現に向けて日夜努力を続けることが大事だと考えます。